



半世紀以上の歴史を持つ精神科病院が  
今後60年先を見据えた増改築を実施。  
独自の空間創出が療養の質を引き上げる

\*



\*

this month Architecture

医療法人 睦み会

むつみホスピタル

徳島市で長らく精神科医療を守り続けてきた城西病院が、将来対応を視野に入れて新館建設を含む増改築を実施。新館の診療開始に合わせ「むつみホスピタル」に改称し、心を癒す最後の砦施設となるべく第一歩を踏み出した。その設計には、真の患者擁護という思いが託されている。

選者／考察者 岩堀幸司 (建築家)  
写真／志摩大輔 (\*印)／日建設計 (\*印)

1959年に設立された医療法人 陸み会・城西病院は、長期にわたり地域に根差した精神科医療に取り組んできた中で、医療ニーズおよび政策の変遷に合わせてサテライトクリニック、デイケア、グループホームなどを併設させてきた他、本体の病院も増改築を重ねてきた。そして病院が「還暦」を迎えた2019年、過去最大の増改築が完了し、施設名も「むつみホスピタル」に改称して、同年7月から診療を開始した。今回は、同法人理事長の井上秀之氏が「次の60年を見据え、精神科医療の未来を詰め込んだ増改築」と説明する同院新館の建築上の特長を紹介する。

### アートの視点から院内をデザイン

当初、医療側から設計に求めたコンセプトは、①これまでのイメージを刷新した地域に開かれた病院、②働き方改革を実現する建築計画、③将来の建替計画のマスタープランの3点であった。これを受けて、設計側はインテリアデザイン部門が積極的にいかかわって職員とのワークショップ形式で目標・課題の抽出を図り、建物環境の作り込みに結び付けたという。併せてアートディレクターが参加し、VI（ビジュアル・アイデンティティ）をトータルコーディネートすることにより、新しい精神科病院のイメージ創出を目指した。これは、①のコンセプトを実現

するためのものである。設計者、インテリアデザイナー、アートディレクターの協働によるコーディネート成果は、院内各所に見取れる。ピロティを抜けて正面玄関から新館に入ると、綺麗に木目の出た打ち放しの壁に囲まれたコンパクトな待合・受付スペースが視線に入る。そこから外来エリアへ移動する間の廊下には、「むつみの道」と名付けられた華やかな壁画が配してあり、法人の理念がアートとして表現されている。

また、フリーアドレスタイプの診察室は、各室ごとに家具や調度のしつらえを変えている。さらに、病棟（3・4階）各階に配した保護室・準保護室のしつらえは4種類あり、患者の症状に合わせて部屋を選定するようにになっている。なお、これらのデザインコーディネートは、患者のみならずスタッフへの配慮でもあることは自明であり、それをまずは評価したい。

### 「壁を取り持つ」独自のな着想

同院は従前、精神科病院の例にもれず敷地を塀で囲っていたというが、今回の増改築を機に「塀のない施設」の実現を目指し、敷地周辺ばかりでなく建物内部、ひいては組織内の壁も取り払うべく建物設計に取り組んだ。その代表例が、新館2階のスタッフ用執務空間「スタッフコモンズ」



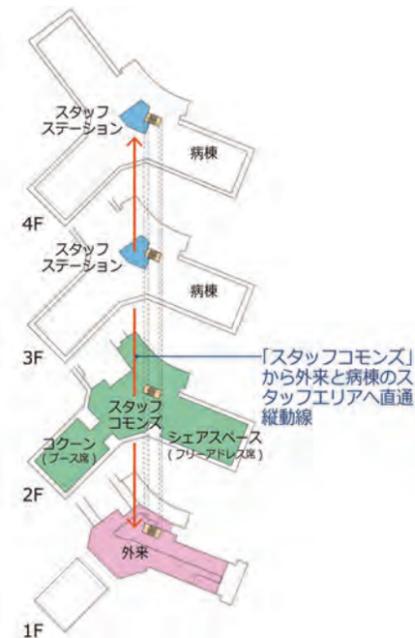
※ 各部屋の間仕切りを取り払った広大なワンルーム仕様の交流・活性的場として機能するスタッフ用執務空間「スタッフコモンズ」



※ 明るく開放的な外来ロビーの奥に「むつみの道」がありその先に診察室が並ぶ



※ 「むつみの道」と名付けられた壁画には法人の理念がアートとして表現されている



である。なお、同スペースの設置は、冒頭述べた②働き方改革の支援も目的の1つであるという。

「スタッフコモンズ」には、コクーン（医局及びフリーアドレステスク、当直リビング）、シェアスペース（コメディカルエリア・フリーアドレス）、事務室、会議室などが間仕切りのない状態で並び、広大なワンルームに多職種が集うことのできる交流・活性的の場となっている。実際、朝のミーティングやティータイムなどの際に、活発な交流が図られているという。

また、バントリリーや病院全体で1カ所しかないコピーコーナーを「スタッフコモンズ」の動線の結節点に配置するなど、スタッフが意識せずとも自然に集うように緻密に計算されている。なお、動線の視点からは、フロア中央の専用階段が外来と病棟ス

### 配置図

